



Socio express

エクスプレス

社会科教育法

小中連携は教科書の持ちあがりと活用から／加藤好一

②

授業実践レポート 「世界と比べた日本の地域的特色」と「日本の諸地域」の往還的な活用を重視した学習構成／太田和幸

⑥

歴史学習とシチズンシップ／吉田英文

⑧

生徒はどのようなときに“主体的”に学ぶのか／嵐 悟

⑩

教育出版

小中連携は教科書の持ちあがりと活用から

加藤 好一

かとう よしかず／前琉球大学教授

● 1. 教科書を比べて歴史を「大観」

中学校(㊥)で歴史を学ぶわずか1年前、生徒は小学校(㊦)でも歴史を学んでいる。他の教科にはない特色ではないか。その㊦の教科書『小学社会6上』を㊥へ持ちあがらせよう。実践を通しての小中連携はその活用から始まる。

まず、中学歴史・第1時間目に『㊦の教科書で縄文時代を探そう。』と指示をする。「ありました!!」「なつかし〜い」(“思い出のアルバム”を見る表情)。

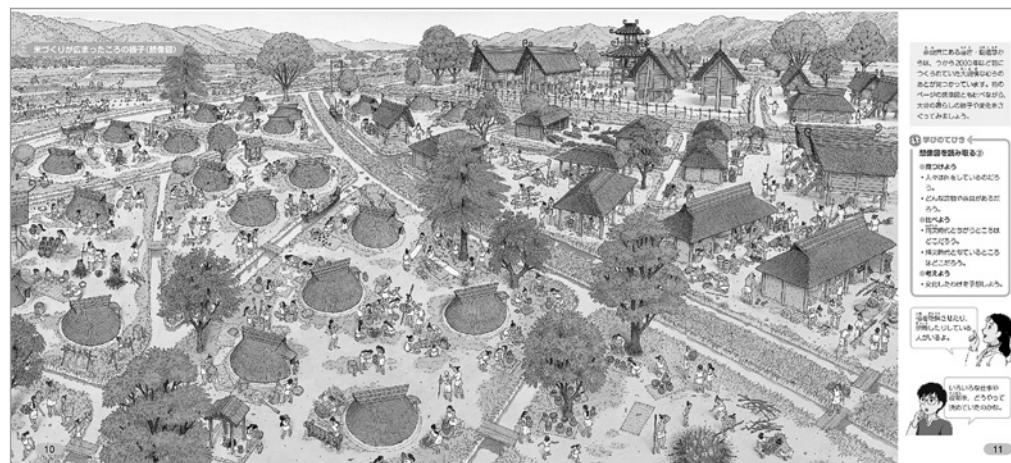
本文の冒頭p.8(『小学社会』教育出版)には「大昔の暮らしをさぐる」との小見出しがあり、土偶・矢じり・土器などの資料が満載である。㊦の歴史学習はここから始まった。『では、㊥の教科書から縄文時代を見つけよう。』『あれ? はじめの方でないぞ。』㊥の歴

史学習は教科書のp.8から始まる。だが、縄文時代はp.15なのだ。『では、㊥では縄文時代の前に何を学ぶか、教科書で探そう。』

人類の誕生や四文明の始まり・日本の旧石器時代など、新しく学ぶ内容が浮かび上がる。㊥での縄文学習は、そうした大きな歴史の流れの中に位置づけるのである。

『次は、ザビエルの載るページを探し、㊦㊥の違いを比べよう。』(相談⇒発表へ)。「㊦はフランシスコがつかない。」「㊥はザビエルが日本でたどった道もある。」「ヨーロッパに行った日本の使節や南蛮貿易も載っている。」ザビエルの絵は共通だが、㊥では日本と西欧との出会いという視点がより鮮明である。

少し時間を与え、他のページも比較させた。生徒はさまざまな時代を「大観」しなが



㉑ [小学校] 弥生時代のむらの様子(想像図)

ら、㊦から㊥へどう学習が広がり深まっていくかをざっくりと見通していく。

授業での小中連携の一步はここから始まる。

● 2. 小中の縄文・弥生学習の違いとつながりとは?

「難しくなるなあ、ついていけるかな。」生徒からの声が聞こえてくる。ならば次は、㊦で学んだ資料そのものを新しい視点から㊥で再活用したい。

㊦の教科書には大きな想像図が各所に載っている。しかもカラーで美しい。縄文・弥生にいたっては村の様子が見開き2ページ余りに広がり、まるでパノラマだ。

教師は何の苦労もせず、おまけに無料で魅力的な資料を入手できたことになる。これを使わないのはもったいない。



㉒ [中学校] 弥生時代のページ

隣の席の者どうし、一方には縄文を、他方には弥生のページを机いっぱいに広げさせる。

『縄文の村にはないモノを弥生の村に見つけて付せんを貼ろう。』情報量が多いので視点はこの一つに絞る。ペアで対話させると全員が楽しく作業に参画し、何も難しくない。

次は『稲作や金属器を使う文化はどこから伝わったか。』と問う。これも㊦p.15の地図を見れば思い出す(忘れていたら覚えればよい)。

ここで、『君たちが中国や朝鮮半島の人なら、この時代に日本列島にやってくるか。』と問いかけたい。「いやだ。不便なところへわざわざ行かない。」「無事に着けるかどうかもわからない。』『なるほど〜』とまずは共感。

『ならば、なぜこれらの人はやってきたのか。どんな事情があったのか。』と重ねて問う。ここから生徒の視野は東アジアに広がり、㊦の学びをふまえた㊥ならではの学習が始まる。

生徒の仮説を㊥の教科書p.20で検証すると、そこには「統一を目指す国々の争いが激しくなった紀元前5世紀ごろ、中国の長江流域や朝鮮半島の南部の人々が、戦乱を避け、新たな土地を求めて九州の北部に渡ってきました。」との記述がある。

人々が命がけではるかな日本列島にやってきたのは戦乱から逃れるためであったとわかった。こうしたかたちで日本史と東アジア史が結びつくところにも、㊦にはない中学歴史学習の一つの特色がある。

だが、その㊥の学びは㊦での学習をふまえている。つまり、㊦では渡来人によって稲作が伝えられたことを学び、㊥では彼らがなぜはるばる日本列島にまで来たか、その背景を

考え検証して視野を広げるのだ。

そうした④⑤の学びの違いとつながりを、例えば以上のように④の資料を再活用しつつ生徒自身にも意識させる。そのことが実践を通した小中連携の第2のステップではないだろうか。

⑤ではさらに、遺跡の増減グラフなどをもとに“なぜ縄文から弥生へと社会が変化したか”も考えさせたい。(拙著『学びあう社会科授業』〈中〉地歴社 を参照)

●3. 教科書の難易度の差をふまえて

さて、持ちあがった④の教科書は教室のロッカーに各自保管させておくが、できればその際④のノートも持ちあがらせたい。

それらは一度社会科担当教師へ提出させ、ざっと目を通してから返却する。今、④ではノート指導に力を入れる学校も多い。

人物学習も推奨され、「聖徳太子」や「聖武天皇と大仏」「藤原道長」などを丁寧に学習してきた生徒もいる。

ノートを見れば、個々の生徒が④で何をどう学び、どう受けとめたかが一目でわかる。

では、④⑤の教科書ではその記述の難易度はどれだけ違っているか。「聖徳太子の政治」を例に、最初の3行に出てくる「難語句」(歴史用語など)を比べてみよう。

④ 遣唐使 聖徳太子 蘇我氏 天皇(4)
⑤ 蘇我馬子 姪 推古天皇 女帝 即位 甥 聖徳太子 厩戸皇子 摂政(9)

1年の差しかないのに、わずか3行の中に⑤では倍以上の「難語句」が頻出。人名も1から4に増える。苦手な生徒にとっては“読

めない・分からない・覚えられない”という困難が生じる。

『聖徳太子の行ったことを四つ思い出そう。忘れていたら教科書で調べよう。』と指示しても、⑤の教科書ではこれら林立する「難語句」に阻まれて、冠位十二階・十七条の憲法・遣隋使・法隆寺という四つの語句を探しきれない。そこから歴史アレルギーが始まる。

かわりに、④の教科書やノートを参照させたとする。記述がやさしいので断然これらの語句を探しやすい。一度学んだ語句を一度学んだ教科書から見つけるのだ。「ああ、そうか。これやったよ。」と既習事項がよみがえる。ノートにいたっては一目瞭然、要点だけを自分の字で書いてある。

ならば、④と共通の語句を調べる時は負担の少ない④の教科書やノートを使おう。⑤の本文は、まとめの段階で「難語句」を解説しながら読ませればよい。調べ学習でのこうした区分もまた、小中連携の一つである。

⑤ではさらに、そうした太子の政治を摂政という語で概括する。⑤の教科書にある系図をマークさせ、太子と蘇我氏との深い血縁関係にも気づかせる。④の教科書には「大きな力をもっていた蘇我氏とともに…」とあるが、⑤ではその協力関係の背景にまで迫るのである。

●4. 「串だんご」と「鎖」の違いとは

ここで学習の流れを見ると、④では例えば①「聖徳太子の理想」⇒②「木簡からよみがえる人々の暮らし」⇒③「聖武天皇と大仏づくり」と小見出しが続く(番号は筆者が付与)。内容を見ると、①の末尾は「この改革を大化

の改新といいます」とくくられている。

だが、②では突如「平城京での人々の暮らし」を木簡から学ぶことになる。つまり、①の「聖徳太子だんご」と②の「木簡だんご」の間には直接の関連はない。

ただ、時代順に並べるという「串」はあるので、このような④の歴史学習は「串だんご」とよばれる(是非ではなく事実の問題)。

これに対して⑤の教科書では、「聖徳太子の政治と飛鳥文化」⇒「大化の改新と大宝律令の制定」⇒「奈良の都と天平文化」へと学習事項が鎖のようにつながっていく。言い換えれば、“なぜそうになっていくのか”という「歴史の流れ」が④以上に重視される。

つまり、小・中歴史学習の違いとは「串だんご」と「鎖」というつながり方の違いでもある。簡単か詳しいかというレベルや量の違いにとどまるものではなかった。

⑤の教師は、小中の教科書を活かし対比する中でこそ、そうした違いを授業に即して理解していくようになる。

●5. 持ちあがりをどう具体化するか

ならば、その契機となる教科書〈6上〉の持ちあがりはどうすれば具体化できるか。

多忙な毎日だ。3月末になって急に小学校に連絡しても徹底しない。「もう捨てた。」「どこにしまったかわからない。」という6年生もいないわけではない。

私は、前年のうちから以下の三つを徹底するよう提案する。

①小学校側では4月の6年進級時に各担任から児童・保護者に連絡しておく。年度末に集めて中学校に送ることも一つの方法である。

②6年担任は〈6下〉の教科書を使うようになって〈6上〉を教室のロッカーに保管させ、しばしば授業に活用する。

例えば政治分野では〈6下〉のp.30に「投票の様子」の写真があるが、その際に〈6上〉p.103の「明治時代の投票の様子」(ビゴーのマンガ)を開かせ、ペアで対比させると気づきが広がる。こうして通年で活用すると、子どもは〈6上〉の教科書を不要と思わなくなる。

③中学側でも、1日入学の際に教科書等の持ちあがりを保護者・6年生に直接よびかける(小学校地図帳は家のテレビの横に置き、日常的に活用すると地理の力が伸びることを紹介)。

以上のような手だてにより、教科書の持ちあがりはしだいに習慣化していくが、それにより小中の連携はどう進むのだろうか。

第一に、小中連携が理念の段階にとどまらない。④の教科書を活用する中で、教材・授業のレベルでより具体的に考えられるようになる。少なくとも、④の教科書を開いたことがない中学教師はいなくなる。

一方、小学校側も中学教師の専門性に深く学んでいくことが可能となる。

第二に、⑤の教師は④の歴史教育との実践上の違いや共通性にこれまで以上に目を向けるようになる。

第三に、そのことが授業を通した④との共同、子どもを中心に置いた連携を実質化していく。多忙を押して会合を開いたが一般論に終始などということは激減するのではないか。

まずは小6の社会科教科書を持ちあがり、実践という場で小中連携の一步をふみだしたい。

「世界と比べた日本の地域的特色」と「日本の諸地域」の往還的な活用を重視した学習構成

太田 和幸

●おおた かずゆき／札幌市立山鼻中学校教諭

●1. 地理的分野の授業はどう変わったのか

学習指導要領では、日本についての地理的分野の学習内容を、「世界の様々な地域」の学習をふまえて、「日本の様々な地域」という大項目のもと、自然環境、人口、資源・産業、地域間の結び付きの四つの中項目に構成している。現在の学習指導要領に改訂されて以来、特に「日本の諸地域」については、「動態地誌」をどう捉え、授業に反映していくかに関心が高まり、先進的な実践例は本誌でも何度も取り上げられてきた。

では、「日本の諸地域」に先立って学習する「世界と比べた日本の地域的特色」の授業はどう変わったのか。もう一つ俯瞰的なレベルで、「世界と比べた日本の地域的特色」と「日本の諸地域」の学習の往還性にはどう取り組んでいるかと振り返った時、私自身の問題意識としても、いくつもの工夫・改善の必要性

を強く感じている。

●2. 「日本の諸地域」と生徒が暮らす地域

「日本の諸地域」の七つの考察の視点は、各地域に対して一つを当てはめることから、日本を7地域(地方)に分割して、教科書も構成されている。例えば、私がいる北海道地方について、指導要領解説では歴史的背景で例示されているが、現行の教育出版の教科書では、「自然環境を中心とした考察」という内容が示されている。

本来、七つの視点はいずれの地方にも設定できるものである。また、すべての視点で自分の暮らす地域を捉えるべきであり、教科書の内容以外に扱いたい学習素材もあるだろう。そこで、私は「日本の諸地域」の学習オリエンテーションの時に、教科書の七つの地域と考察の視点の関係を以下のように示し、自分の地域を捉えるようにはたらきかけている。

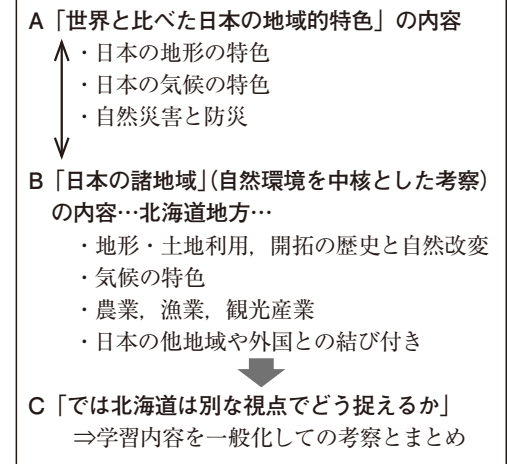
	九州	中国・四国	近畿	中部	関東	東北	北海道
自然環境	火山と自然 沖縄の自然	瀬戸内の気候 平地の少なさ	紀伊山地 平地の少なさ	三つの気候区 山地と自然	関東平野 利根川の自然	雪と寒さ 二つの気候	自然の特色 大規模農業 自然と観光
歴史的背景	九州の歴史 琉球の歴史 アジアの交流	戦国時代 瀬戸内の海運 広島原爆	景観保全 大阪の変化 琵琶湖の環境	戦国時代 織田・豊臣・ 徳川氏の政治	鎌倉・江戸時代 江戸期の開発	古代・中世の 東北の歴史	アイヌ民族 明治期の開拓
産業	畑作・畜産 北九州の工業 対アジア貿易	農業・水産業 果樹・野菜 瀬戸内の工業	近畿の工業 阪神工業地帯 伝統工業	中部の工業 農業・水産業 伝統産業	情報・通信 関東の工業	農業・水産業 伝統と観光業	大規模な農業 食品加工中心
環境問題 環境保全	観光と環境 災害と防災 工業と環境	海の汚染問題 林業と保護	琵琶湖の汚染 都市化と環境	気候の活用 水資源の保全	過密と環境 高温化対策	原発問題 冷害対策	克雪・利雪 再生エネ活用
人口や 都市・村落	北九州への 人口集中 過疎化の進行	過疎対策 地場産業 交通整備	大阪への集中 南紀の過疎化	集中と流出 東海への集中	東京への集中 都心部再開発	過疎化の進行	札幌への集中 過疎化の進行
生活・文化	アジアの交流 琉球文化 沖縄米軍基地	信仰と生活 瀬戸内の文化	伝統文化 寺社・文化財	北陸の伝統 伝統産業	情報・文化の 発信	自然と生活 地域文化活用 農村の変化	アイヌ文化 雪国の生活
他地域との 結び付き	アジアとの交流 本州との 結び付き	近畿・九州との つながり	関東・中部との 結び付き	関東・近畿との 結び付き 環日本海交流	東京大都市圏 国際都市東京 工業立地	関東との 結び付き	本州との 結び付き

↑※網掛け部分は教科書に示されている部分

●3. 往還的な活用に着目した学習の実践例

(1)日本の自然環境の特色と産業・結び付き

「世界と比べた日本の地域的特色」で学習する日本の自然環境の全体的な特色は、「日本の諸地域」で各地方の産業を捉えていく大切な知識となっていく。札幌市では、北海道地方を「日本の諸地域」の最初に学習することから、私は前掲の表に関連付けて自然と産業と国内外の結び付きを視点に、学習を進めていくことにしている。下の単元相関図のように、AとBの項目の学習をつないでCの学習を設定することで、A・B・Cの学習を往還的に活用していくことをねらいとするものである。

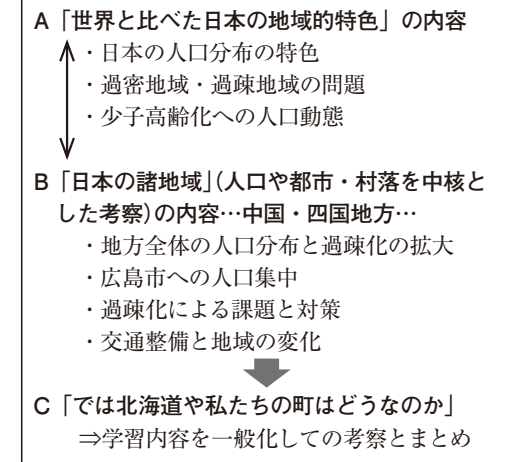


① 自然環境と日本の諸地域の学習相関図

(2)日本の人口分布の特色と過密・過疎問題

「世界と比べた日本の地域的特色」で学習する世界と日本の人口の特色をふまえて、「日本の諸地域」では、どのような具体的な問題があり、そこに住む人々がどのような取り組みをしているのかを学習していく。(1)の実践のように、A・B・Cの学習を往還的に活

用していくことをねらいとするものである。



① 人口と日本の諸地域の学習相関図

北海道地方の学習をもとに、他地域の学習のまとめを、自分の暮らす地域に当てはめて考察する学習を設定する。ここまで学んだこと(知識)を一般化(概念化)し、往還的に活用することによって地理的なものの見方を中心とした地理的分野の学力が育っていくものと考えている。

●4. 今後に向けて

紙面の都合上、生徒の記述などを掲載できないが、往還性を重視した活用のある授業を重ねることで、生徒には少しずつマクロ的(巨視的)・ミクロ的(微視的)な視点で事象を捉える力が育っていると感じる。学習したことを他分野の学習とつなげ、真に社会的なものの方・考え方を備えた生徒を育てたいと考えているが、分野間のつながりの精選や中学校社会科としてのアクティブ・ラーニングの捉えなど、いくつもの課題がある。今後も多くの理論と実践から学ばせていただきたいと考えている。

歴史学習とシチズンシップ

吉田 英文

●よしだ ひでふみ／東京都立府中東高等学校教諭

●1. はじめに

現在、選挙権年齢が18歳に引き下げられることなどもあり、シチズンシップ教育が改めて注目されている。社会科でも、選挙に直接関わる公民分野が特に注目されているように感じるが、社会科の理念を考えると、地理や歴史でもシチズンシップ育成を目指した授業がなされるべきと考えている。というのも、社会科は民主主義の担い手としての資質＝シチズンシップを育成するための教科として誕生し、歴史も地理もシチズンシップ育成に寄与するものと考えられていたからである^{*1}。社会科という教科が誕生してちょうど100年目を迎えている今^{*2}、歴史でもシチズンシップが育成できるのではないかと、授業の一例を紹介したい。

●2. 「社会科歴史」の考え方

授業を紹介する前に歴史の教育には二つの立場があることを論じておきたい。「歴史教育」と「社会科歴史」である。論者によってニュアンスは異なるが、前者が「歴史学」を重視し歴史を学ぶこと自体に意義を見出す立場で、後者が歴史学習をシチズンシップ育成の手段として位置付けるものである。本稿で紹介する授業は、もちろん歴史学の知見をもとにしているが、目標としてはシチズンシップ育成を目指している。なぜなら全員が歴史学者を目指すわけではなく、市民の育成の方が義務教育の目的にかなっていると考えからである。

●3. 授業実践

ここでは「人口からみた日本の歴史」の実践を紹介したい。これは新版(平成28年度版)歴史教科書183ページを授業化することを想定したものである。人口の歴史というと、歴史学的には「なぜ古い時代の人口を知ることができるのか」という問いで、戸籍や宗門改帳、遺跡や石高などの史料や史跡から推定したことを重視するだろう。しかし社会科歴史の立場からは「移民」や「食糧不足と戦争の関連」「少子高齢化」など、社会問題に関連する内容を重視する。

実際に行った授業の展開は、以下のとおりである。

導入として、1位の中国と2位のインドを隠した国別人口ランキングを示し、何のランキングかをクイズとして出題する。勘のいい生徒は、それだけで正答を導くが、難しい場合は1位と2位をヒントとして示して考えさせる。その後、現在の日本の人口が約1億2000万人であることを引き出し、江戸時代や縄文時代といった古い時代も1億人近い人々がいたのだろうかという問いかけ、本論に入る。

本論では、縄文時代から現代にいたるまでの人口をクイズ形式で答えさせていく。過去の日本列島の人口は教科書にもあまり書かれていないので、歴史が好きな生徒も苦手な生徒もともに予備知識がなく、同じように楽しんで予想をたてて探究過程を共有することができる。縄文時代には2万人しかいないこと、また平均寿命

15歳という短さは15歳前後の生徒にとっては驚きである。なお15歳まで生き伸びても、平均余命はプラス15年程度という。ちょうど筆者と同じ30歳の頃である。

最初は、人口が予想以上に少ないこと自体に驚くが、それだけでは単調になってしまう。そこで随時、特徴的な変化を示す時期を示し「なぜ?」と問う。例えば、なぜ弥生時代から奈良時代にかけて10倍近く人口が増えているのかを問い、稲作という食糧生産の増大だけでなく、渡来人＝移民の増加に気づかせる(論者によってはこの時期8割程度が渡来系氏族とも)。このことから素朴な「日本人」という認識に揺さぶりをかけたり、在日外国人への差別を考えさせたりする。また、中世になると増加してきた人口が減少することに注目させ「なぜ?」と問う。背景にある食糧不足＝飢饉が源平の合戦や戦国時代といった争いに関連することを指摘し、歴史学の研究や新聞記事をもとに、第二次世界大戦にいたるまで食糧不足と戦争が関係することなどを示したりする。これ以外にも大正期の人口過剰が海外移民につながることや、2000年代に人口減少がはじまり、現在が人口の面で時代の大転換であることを、適宜教員が解説を加えながら考えさせていく。

最後に、100年後の人口を生徒に予想させる。「未来へ活かすために歴史を学ぶ」という意見はよく聞くが、景気が良くなるのか悪くなるのか、政権交代や戦争が起きるのか起きないのか、正直歴史を参照しても未来は不透明である。しかし「人口の増減はある程度予想できるし、予想とそう変わらない」と生徒に伝える。ちなみに約100年後の2112年に、かの有名なネコ型ロボ

ットが誕生する予定である。その頃の人口は?と問いかけてみても面白い。これだけ「人口減少社会」と言われていても、生徒の大半は「2億」「3億」と、人口は増加すると答える傾向がある。明治時代以降、約100年前に約4600万だった人口が3倍近くに増加し続けていると、そう予想してしまうようである。そのような予想のなかで「約4700万人」(中位推計)と板書すると、クラスによってどよめきが起こったりもする。ちょうど100年前の人口と同じくらいでもある。人口減少と関連して少子高齢化を挙げ、介護の人材の不足の問題を投げかける。フィリピンの外国向け介護士を育成する学校を取材した映像を見ると、日本に行きたいフィリピンの学生は30人中1人しかいない。そのような中、海外からの移民のハードルを現在のように高いままにするのか、変えていくのか、君たちが有権者になった時に問われると思う、と授業を締めくくる。

●4. おわりに

シチズンシップに寄与する歴史学習は、今回紹介した実践のようにテーマ史で行うことも可能であるが、単発の授業だけでは大きな効果は期待できない。やはり年間を通して、毎回の通史の授業でシチズンシップ育成を意識することが重要だろう。小さな変革かもしれないが、現場でも取り入れやすく、歴史の授業がシチズンシップを育成するものになっていくのではないかと期待している。

*1 社会科の理念、歴史などをわかりやすく解説したホームページ(東京学芸大学 渡部竜也研究室)
<http://sswatanabe.web.fc2.com/>
 *2 1916年にアメリカ教育学会がだした報告書『中等教育における社会科』が社会科の誕生とされている。

本稿は2015年度日本社会科教育学会の春季研究会で発表した内容の一部を紹介したものである。

生徒はどのようなときに“主体的”に学ぶのか

嵐 悟

●あらし さとる／八王子学園 八王子中学校・高等学校教諭

●1. はじめに

八王子学園八王子中学校では教育方針の一つとして、世界に通用する人材の育成を掲げている。そこで、3年次に3単位で学習する公民は、中高一貫の特性、つまり高校受験を意識する必要がないことを利用して、一学期すべてをかけて国際社会を学ぶことにしている。テーマは「世界を見る目を養う」。夏休みにオーストラリアでの語学研修を控えていることもあり、なかなか生徒に好評である。

時事ネタをふんだんに盛り込み、国際社会の成り立ちや国連のしくみ、そして紛争や人権、人口・食料問題、貧困と開発などのグローバル・イシューズを順に学んでいく。自分たちが知らなかったことを学習する生徒たちの目は輝いており、授業アンケートでは「興味をもてた」、「関心が高まった」などの声が寄せられていた。しかし、それ以上の深まりがなかなか見られない。興味や関心は重要な一歩であるが、アンケートからは生徒の受動的な姿勢が感じられた。

●2. パンフレット作成

そのような生徒の姿勢を変える狙いで取り入れたのが、パンフレットの作成である。テーマはグローバル・イシューズの中からなんでも選んでよいとする。授業で使うのは2時間。事前にテーマを選んだ状態で図書館に集合するよう伝えておき、まずは自分のテーマに沿った本を見つけるように指示をする。基本的に生徒は社会科学等の本棚に行き、必死

に本を探すことになる。本を見つけることができれば、次は「情報カード」にパンフレットで使用したい部分を書き写す作業。インターネットで安易に済ませようとすることを防止するためである。このあたりの一連の動きは司書教諭のアドバイスを参考にした。

さて、本からの情報を自分なりにカードに整理できたところで、ようやくパンフレット作成の本番を迎えることになる。授業でパンフレット作成に充てる2時間は、ほとんどここまでで費やされることになり、実際の作成は家庭学習の時間を用いる。パンフレットの対象は、本校に学校見学のために来校した小学6年生を想定。自分より年齢の低い対象に対してわかりやすく伝えるにはどうしたらよいか、これも中学生にとってはチャレンジとなる。本番に向けては、調べた内容を自分で文章化したものと、本などからの引用、つまり他人が文章化したものを明確に分けて書くように指導も行う。パンフレットの末尾には、参考文献と作成の感想も記載する。

真っ新なB4上質紙一枚を生徒に渡し、それをどのように使用してもよいと伝え、当然戸惑う生徒も見られる。二つ折り、三つ折り、四つ折り…同じ用紙を使っている、印象がかなり変わってくるので、そこにも個性を発揮させたい。独自のキャラクターをつくって貧困問題を語らせる生徒、クラスター爆弾の写真を貼り付ける生徒、世界の紛争を地図で表現する生

徒…それぞれの工夫が垣間見えたのも興味深かった。そして何よりも、「授業で疑問に感じたことを深く調べられて楽しかった」、「同じテーマを選んで人と相談したり話し合ったりするのが楽しかった」など、生徒の能動的な姿勢が見られたことは成果の一つと考えている。

●3. ゲストスピーカーを招いての特別授業

今年に入って、大学の国際開発学部に進学した本校卒業生が、短期留学プログラムでフィリピンの貧困脱出プロジェクトのフィールドワークに出かけた。ちょうど公民で南北問題を扱う予定があったので、帰国後の報告を特別授業という形で母校に還元してもらえないかと依頼して快諾を得られた。南北問題も授業では生徒の興味を引く話題ではあるが、解決に向けた取り組みまで今一つ実感をもたせられているか疑問に感じていた。生徒は途上国の惨状に同情し、貧困脱出への共感をもって今度募金したいと思います…というような感想をもつ。それ自体は悪いことではまったくないが、物足りなさも感じていた。

フィリピンから帰国した卒業生に早速来校してもらい、打ち合わせを行った。テーマは「魚をあげるのではなく、釣る方法を教えること」。消費してしまえばなくなってしまう援助ではなく、継続的な収入の手段を得られることが貧困脱出のカギになるという意味である。具体的にはフィリピンのスラムの実情を報告した後、そこからの脱出のための取り組みを紹介する流れとした。これを中学生にいかにしてわかりやすく伝えるか、そして彼らが少しでもリアリティを感じて色々と考えてくれるのか、準備段階では大学の教授も巻き込んで試行錯誤した。



① 生徒が作成したパンフレット

実際の授業では、今年度より各教室に設置されている電子黒板を使用して、クイズや発問などでコミュニケーションをはかりながら進めた。また日本でも手に入れることのできるフェアトレード商品に加えて、フィリピンのマーケットで実際に販売されている、ジュースの紙パックを再利用して作られたバッグなども教室に持ち込んだ。生徒は実際にフィリピンの人々が手作りのものを手に取って、それが「魚を釣る方法」を意味することを実感できたようだし、自分たちにできることを真剣に思考した過程が授業後のアンケートからも読み取れた。

授業者は教育学を学んでいるわけではないが、大学2年生であったが、PowerPointを使用し、ダブル・ティーチングのような形で私が補助したことも授業のよい流れをつくった要因になったと感じている。

●4. おわりに

どちらの実践も特に目新しいものではないし、際立った成果をあげられた実感は正直まだない。これからは試行錯誤となりそうだが、ただ、2020年に向けて私たちが育まなければならないとされている、思考や判断など知識を活用する力は、何か特別な新しい取り組みをしなければ育むことができないわけではない、という方向性は見えてきている。ICTはもちろん非常に有用なものではあるが、一方で生徒が立ち止まって自ら考えるのは本を読んだり、文章化したり、手に取ってみたりしたときなのである。重要なのは手段ではなく目的なのだと感じている。



第13回

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2015年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生 (数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2015年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品

挿し木

私は「挿し木」について考えました。私の家には、枝が長くとても高い「ウンベラータ」という木があります。その木がのびすぎているので、枝を切ってまた小さい木を育てはじめたり、いこにわけたりしています。このように、少しずつ木を増やしていくことによって、酸素がふえて環境にいいことを改めて感じました。しかも、タネから育てるよりも早く大きく育ちます。そして、一つの木から何個かにわけるので、良いところを受けつづことができます。私の家ではいろいろな木や草、花を育てています。それらは、私たちの生活にかかせない大切なものです。植林などもありますが、身近な家にあるものでも、少しずつ環境にやさしいことをしていきたいと思います。そして、一人一人が“植物”を大切にすることで、これからの将来につながると 생각합니다。



【表紙写真】ロンドン市内を流れるテムズ川に架かるタワーブリッジ。2基の塔を備えた跳ね橋は、テムズ川の象徴的な景観となっている (上写真)。ロンドン中心市街のピカデリーサーカスの一角。伝統的な建造物の中に屋外広告が目立っている (下写真)。〔2015年 イギリス〕

中学社会通信 Socio express (2015年 秋号)

2015年9月1日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局
印刷: 大日本印刷株式会社

発行: 教育出版株式会社 代表者: 小林一光
発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社	〒060-0003 札幌市中央区北3条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所	〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング 3F TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社	〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社	〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社	〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社	〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社	〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社	〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室 TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所	〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411